



全国病院・クリニック訪問

江本内科

〒755-0022
山口県宇部市神原町1丁目4-10
TEL: 0836-38-5126 (代)
URL: <http://www.emoto-clinic.org/>



院長：江本政広先生
Emoto, Masahiro

スタッフ

医師：常勤1人
(糖尿病専門医・糖尿病研修指導医)
看護師：常勤2人、非常勤1人
(うちLCDE3人)
管理栄養士：非常勤2人
(うちCDEJ1人)
受付：常勤1人
CDEJ：日本糖尿病療養指導士
LCDE：地域糖尿病療養指導士

指導・活動内容

- 患者さんに対しては、個別指導を基本としています(患者数がまだ少なく集団指導の必要性が乏しい)。指導には、あえてITは活用せず、手書きメモやあらかじめ用意したプリントを使用しています。自宅での復習やご家族との情報共有を容易にします。
- 10年間LCDE養成に講師としてかかわっています。
- 医療職スタッフには、地域で行われる勉強会や技術講習会への積極的出席と関与を奨励しています。
- すべてのスタッフに学会発表を勧めています(2015年の日本糖尿病学会学術集会では2人が口頭発表)。
- 糖尿病専門医を対象とした、基礎から臨床研究まで網羅した、勉強会(抄読会)を立ち上げました。

施設・設備

クリニックの建物は、山口市在住の建築家・永見龍一氏の設計で、隣接する女性クリニック(別棟)とあわせ、2014年日本建築家協会の中国建築大賞優秀賞を受賞しました。白色を基調とし、採光(窓)に特徴があります。明るい雰囲気です。

医療設備は、糖尿病クリニックとして一般的ですが、糖尿病の診療に必要な検査(検尿・血糖・HbA1c測定)に要する時間は5分以内です。再診患者さんの場合、受付から診察・会計まで最速で約15分です。サラリーマンなど時間に追われている患者さんも受診しやすいよう配慮しています。

検査体制

検体検査：末梢血(CBC)、HbA1c、血糖、検尿は、自前の設備で迅速検査可能です。その他の生化学検査は、外部委託ですが近くに検査会社の支店があり急げば30分以内に初期結果通知が得られる体制です。生理検査：レントゲンは単純撮影のみ可能。超音波装置は、甲状腺も専門とするため、表在性12MHzのプローブを採用し、甲状腺用にチューニングしていただいています。副甲状腺エタノール局注療法施設(届け出施設)も満たしています。

(2016年1月現在)



糖尿病医療という海原を航海する、工夫と理想を詰め込んだ方舟のように

江本内科が建つ「神原町」と道路1本を挟んだ北側に「梶返」という地名がある(現在の町名は「東梶返」と「西梶返」)。ここには梶返天満宮があり、菅原道真公が九州太宰府に流される際、乗っていた船が暴風雨に遭ったため当時海に面していたこの地で船頭が梶を返し、入り江に避難し嵐が止むのを待ったという言い伝えをもつ——。江本内科院長・江本政広先生のプライベートスペースの本棚に「菅原道真事典」なる本を

見つけて蔵書とされているわけをうかがってみると、こうした逸話を教えてくださった。

こちらのスペースで江本先生は、なんと市販されていない検査機器を自作されているという。実際に拝見させていただくと、想像以上に本格的だ。クリニックの真っ白な建物自体にも患者に寄せるあたたかな工夫が溢れている。穏やかな笑顔の奥に垣間見える探究心と行動力。その源泉はいかなるものなのだろうか。



①：江本政広先生「大学病院時代も含めて20年以上の診療経験から、患者さんが自己決定権をもつほうがうまくいくと思うんです。こちらから一方的に『こうしてください』だと患者さんには何も聞いてくれませんが、自分で決めなくてはいいけないとねば聞いてくれます。それなりの納得を得てから判断・決定した治療ですから、中断せず継続するケースが多いようです」



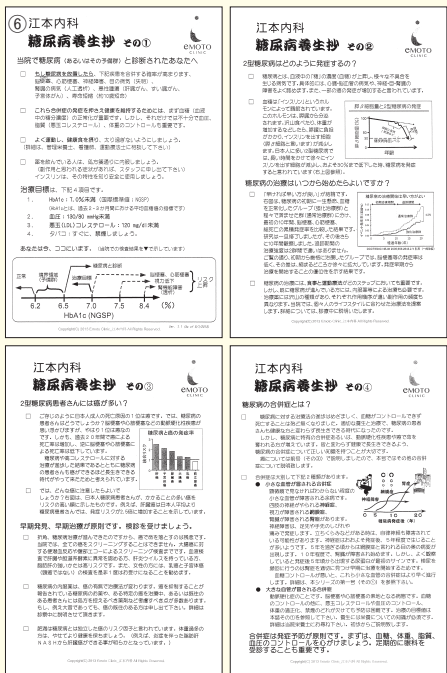
②：(写真上段左から)河口ひろみ先生「患者さんを診察室に案内するまでに必要な情報を収集し、診察がスムーズに進むよう心がけています」、若林千晶先生「患者さんの不安や心配を取り除けるよう笑顔で接しています」、和田由美先生「採血などで患者さんには苦痛を与えてしまうのでさりげなくお話を少しだけでも和らぐようにしています」(以上、看護師)。(下段左から)足立真知子先生「指導のなかで押しつけにならないよう状況や経緯を把握して患者さんのプライドを傷つけないよう気をつけています」、塚原由紀先生「患者さんがなんでも話せるアットホームな雰囲気のために笑顔で、窓口に最初には患者さんと接するので、安心していただくために丁寧な対応を心がけています」(受付・医療事務)



③：建築時期は異なるが、ひとりの建築家による設計。落成直後のように真っ白い壁が映えている。



⑤：待合室の壁際に設置されている資料ラック。江本内科独自の資料に加えて、健康に役立つ数々の資料が並べられている。

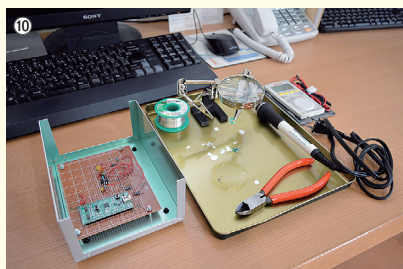


⑥：江本内科オリジナルの糖尿病教材「糖尿病養生抄」。現在「その15」まで発行。糖尿病に関して、患者さんが知りたいことがコンパクトにまとめられていて読みやすい。

⑦：待合室から、処置室・診察室・栄養相談室までをつなぐ通路。突き当りの栄養相談室手前左側が診察室であり、診療を終えた患者は右側の大きな窓から見える風景とまづ対面する。窓枠が壁に埋め込まれており、窓が窓として意識されにくい設計になっている。
「通院治療がおくくでも、この窓からの風景が見えたら気が晴れるかなと思うんですよ（江本先生）」。



⑧：栄養相談室。壁の棚には栄養関連の書籍やフードモデルが並んでいる。



⑩：江本先生試作中の脈波計。通常の脈波計は洗濯ばさみのような形状でそこに挟める部分でしか計測できないが、こちらは足のふくらはぎなどでも測れ、膠原病の診断での活用が見込まれている。

⑨：紙カルテがびっしりと並んだカルテ棚。診療時の検査結果はサーバーを通じて診察室のパソコンですぐに参照できるが、カルテ自体は全体の一覧性を重視して電子化はせず紙のまま。

医師・医療スタッフの視点

訪問者 椎木幾久子 Shiinoki, Kikuko 先生
山口大学医学部分子代謝制御学講座 研究員



1 患者さんの自己決定を大切に 一実施される治療を目指して一

まず印象に残ったのが“自己決定”という言葉です。たしかに一方的に「この薬を飲んでください」と言われても、心に残らないし実行しにくいと思います。江本先生の「自分で決めるとなると、患者さんもういろいろわからなかったり不安なことを質問してくれる。こちらで決めると何も質問してくれない」と言葉に納得しました。どんなに素晴らしい治療も患者さんに実際にやっていただかないと意味がありませんからね。

2 患者さんの立場に立ったきめ細かい対応 まずは話を聞くことから一

先生も、スタッフのみなさんも、患者さんのお話をきちんと聞くことを心がけているとおっしゃっていました。話しやすい雰囲気、白を基調として窓が大きな建物や医療者側の人柄や心配りを通してつくりだされていると感じました。ひとりの患者さんにひとりの看護師さんがつき、待合室からの呼び込み、採血・検査、そして診療が済むまで担当するシステムを導入しているのも、患者さんと医療スタッフの距離を近づける役割を果たしていると思います。

受付スタッフの方が待合室で時間を気にしているように見受けられる患者さんに声がけするなど、本当に患者さんの立場に立たないとできないことだと思います。

3 “継続”を重視した診療一全体と一貫性一

紙カルテを活用しているのは、患者さんの経過全体を見渡しやすいからとかがいました。患者さんの全体像は、ある一点で見てもよくわからず“継続”して見なければなりません。考えてみれば糖尿病とは、そういう病気だったなあと気づかれます。前項で挙げた、ひとりの患者さんにひとりのスタッフがつくのも、その患者さんを“継続”して見なくてはという思いの現れではないでしょうか。

診療を予約制にしていなかったり受付から会計まで最短15分を目指しているのも、患者さんのわずかな空き時間で通院を可能とし継続して通っていただくために重要なのかもしれません。



⑪：椎木先生と江本内科のみなさん。
椎木先生：「わたしは日頃研究職に従事しておりその成果は新薬に結びつくものですが、日々患者さんと接するみなさんの、真摯であたたかな指導がないと結局患者さんに使っていただけません。今回は医療現場の思いに触れる貴重な機会となりました。江本先生、そしてスタッフのみなさん誠にありがとうございました」